

看護職部門

最初で最後の1枚

とりうみ よういち
【鳥海 洋一・神奈川県】



入選

タンザニアの病院で看護師として支援活動をしていた時のことです。小児がんセンターができたと聞き、見に行きました。すると、子どもたちが「遊ぼ!」と寄ってきました。その時、私の白衣を引っ張る少年がいました。少年は声を掛けても、じっと私を見つめ何も言いませんでした。

ある日のこと、カメラを持っている私を見つけ「写真撮って!」と、子どもたちが集まってきました。写真を撮っていると、またあの少年が私の白衣を引っ張っていました。「君も撮る?」と聞くと、少年は黙ってうなずきました。「また、黙っている…」と私は少年のことが気になり始めました。

数日後、子どもたちが「写真まだ?」と私のそばにやってきました。「忘れてた!」。慌てて現像し、写真を届けにいくと、みんなすごく喜び、写真を持って帰りました。しかし、1枚だけ写真が残っていました。私を見つめ白衣を黙って引っ張っていたあの少年の写真です。私は同僚の看護師に尋ねました。すると、昨日亡くなったことを教えてくれました。私はあまりの衝撃に言葉がありませんでした。「渡したかった…」と看護師に写真を見せると、「あそこにまだ、その子のおじいさんがいるよ!」と教えてくれました。

急いでおじいさんの元に行き、写真を渡し、「遅くなってごめんなさい。写真、渡したかったんですけど…」と伝えました。気付くと涙があふれていました。「あの子はもう神様の所にいるから大丈夫。泣かないで。あの子は生まれてから1枚も写真を撮ったことがなかったから、きっとすごく喜んでいると思うよ。本当にありがとう」とおじいさんは言いました。

「あと1日早く来れば少年に直接写真を渡せたのに…」と後悔で胸が苦しくなりました。しかし、写真を渡せたことで、おじいさんはいつでも少年の顔を見られる。そう思うと、少年にとって最初で最後の1枚の写真を撮れたことを、今は後悔ではなく光栄に思います。